

会長就任にあたって

山口大・理学部

千葉喜彦

生物リズム研究会は今年で10年目に入ります。この研究会は故高木健太郎先生のご尽力で設立され、代表者と初代会長であられた川村浩先生、事務局の川崎晃一先生、上園慶子先生のご努力によって維持運営されてきました。

昨年東京で開かれた総会で、新しい規則のもとで私が3年間会長を務めることになりましたが、ご挨拶を申し上げるまえに、まず、上の方々に心から感謝いたします。

共同体（群集）から細胞までの構造段階に普遍的な自律振動は、生命科学の基礎分野のなかで広く注目されています。また、振動の形を直接とらなくても、機構の中心部分に振動が存在する可能性が議論されている生命現象もあります。一方、自律振動研究の応用的な意義に対する認識も急速に高まりつつあります。私はこの広がりをお大事にして、研究会の発展につなげたいと思います。

自律振動の問題を時間の問題としてみると、またそこに、別の広がりが見いだせます。時間は発生生物学あるいは老年学の問題でもあります。場合によっては、こういった分野にまで目を向けるのも大事かもしれません。

とまれ、さしあたって私は、研究会を基礎、応用を問わず、自律振動に関心を持つ人達のものにすべきだと考えています。研究会も10年、新しい段階を迎えるにあたって、日頃考えてきたことを述べてみましたが、これが刺激になって、研究会の将来すなわち学問の展望に関して会員各位の間で活発な討議がなされることを期待いたします。

今年は年次集会が、中島秀明先生のお世話で岡山で開かれます。私はこれを、新しい段階の出発点にしたいと思います。できるだけ多くの方が出席して、研究の成果を交換し合い、また会の将来について語り合うことができるような集まりになることを望んでいます。